



「鍼灸」は「効果」があるのか？

文●関 忠雄

最終回

経絡および鍼術

1. 鍼術と解剖学

中国最古の医学書と呼ばれる「黄帝内経」は中国の前漢の紀元前140年頃に成立したといわれている。鍼術は中国から朝鮮の新羅を経て642年(皇極天皇元年)に帰朝した紀幾男麻呂(きのきのみまろ)によって日本に伝えられた。これにより紀幾男麻呂は鍼博士とされ日本の鍼術の祖となった。

安永3年(1774年)に杉田玄白らは「ターヘル・アナトミア」を翻訳し「解体新書」を刊行したが、神経という概念を知らなかった当時は石坂宗哲たちから痛烈な批判をあびた。

19世紀の末から20世紀の初めに末梢神経の肉眼解剖学が発展した。現在の解剖学はマクロ解剖学(肉眼解剖学)とミクロ解剖学(電子顕微鏡を駆使した解剖学)に分化し、ミクロ解剖学に重点がおかれるようになっていく。

2. 経絡否定論

1952年に米山博久氏が発表した「経絡否定論」は、鍼術の基本概念としての経絡の存在を否定したために激しい論争を巻き起こした。経絡の存在を当然の前提とし、その上に治療体系を作るのか、あるいは全く経絡というものを考えずに鍼術を考えるのか。「経絡」という、永きにわたって鍼術の根幹を支えてき

た基礎的な考えの評価をめぐる議論は、いまだに明確な決着をみていない。

刺鍼したときに、電気が走るような響きは鍼術を経験した者なら誰でもよく知っている。この現象の観察なくして経絡という着想は生まれなかつたと思われる。「経穴」という点(ポイント)は痛みに苦しんだ古代の人でも、今の私たちでも同様に認識できる。しかし、各点をどのように結びつけるかは、その国によって異なっている。

古代の中国でも現代でも人体が格別に変わつたわけではなく、神経構造も変わつたわけでもない。しかし、これを観察する手段と人体に対する考えは格段に変わつてしまった。古代の中国では、鍼の独特の響きから人間の末梢神経をデッサンするのに「経絡」という形を用いた。(神経と経絡図)

経絡否定論は西洋医学的観点から古代人のデッサンを大胆に否定した。鍼術の科学化の必要性という当時の状況からすればやむをえないことであつたかもしれない。ただ古代人が描いたデッサンを後世の医学理論で否定するのは古代人に酷であらう。

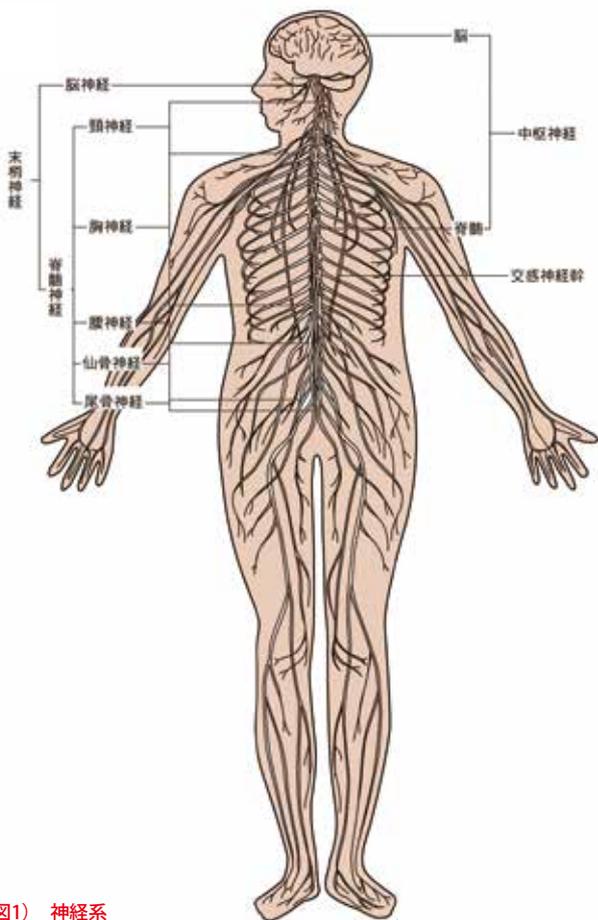
3. 鍼の治効理論

最初のころ筆者は鍼の治効原理は、神経の切断とその再生(ウオーラー変

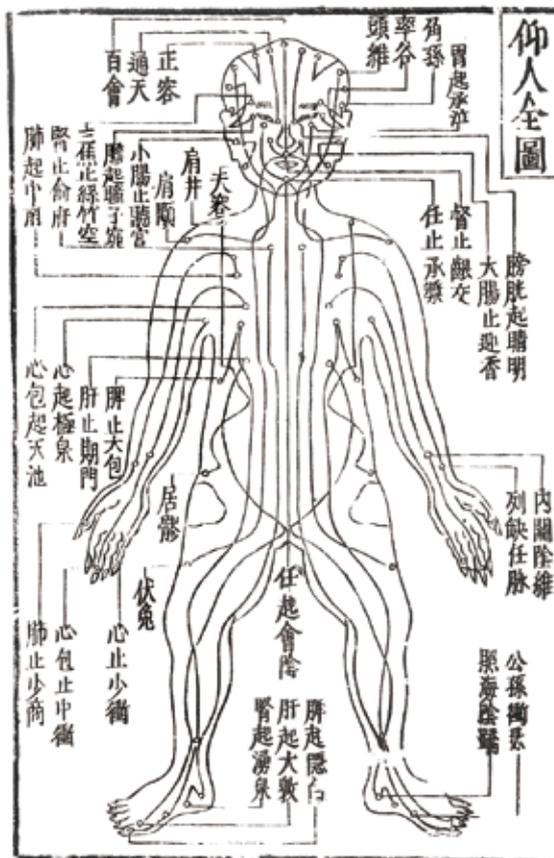
性)がその基本と考えていた。ところが新潟大学の解剖学教室で神経線維を包んでいる結合組織は強靱なものであり鍼灸の鍼ではとても切断できないことを知つてからは、鍼は単に末梢神経線維を刺激することに意味があると考えを変えた。

また末梢神経でも副交感神経の中の迷走神経がその複雑な走り方からして経絡の原型であるように思えた。しかし神経線維にも知覚神経・自律神経・運動神経があり、痛みやしびれそしてマヒにも鍼術が奏功することを考えると末梢神経すべてが鍼術の対象なのだと考えを改めた。

鍼術のすぐれている点は、直接に末梢神経を苦痛なくそして物理的に刺激できるという点にある。この点で鍼の施術は高度に発達した現代医学の方法に比べても遜色がない。そのため他の施術法に比べて長い年月を生き延びてきたのである。鍼が細いことにより、人体の痛みの配列を考えれば最も苦痛の少ない施術点を選択できるという利点がある。物理的に刺激するということは神経線維の興奮状態を人為的に変動させる(レーザー鍼による施術や神経線維に鍼をあてない施術には限界があるであろう)。しかし、どんなにすぐれた名人でも自分が思つたように神経線



(図1) 神経系



(図2) 経絡

維の興奮状態をコントロールすることはできない。鍼術の後、かえって痛みが増したという状態は起こりうる。神経線維の興奮状態を人為的に変動させることが鍼術の目的なのであるからそれは仕方のないことではある。

4. 鍼灸の適応と限界

末梢神経を持つ生物であるならば鍼による施術は可能である。犬でも猫でも馬でも鍼施術は人と同様の効果がある。末梢神経の人為的な変動を鍼術の持つすぐれた力と考えることは、鍼術がどこまで可能能力を持っているかと同時にその限界を示すことでもある。

病氣の名前はその社会に合わせて変化する。特に昨今の症候名は疾患を最初に報告した人名が付けられている、症候名からその疾患を考えることができない。パーキンソンはナポレオン時代のイギリスの医師の名前で、アルツハイマーは第一次世界大戦の頃のドイツの医師である。

「末梢神経」という視点から鍼灸の適応と限界の問題を考える方が、病名から考えるよりも鍼灸の適応と限界を正確に判断できるのではないかと思われる。



関 忠雄
Seki Tadao

1949年 長野県生まれ
1973年 中央大学法学部卒業
1978年 早稲田鍼灸専門学校卒業
倉島宗二師に師事 臨床鍼灸学を研修
関鍼灸治療室を開設
2003年 新潟大学医学部第一解剖学教室で末梢神経(自律神経:迷走神経)解剖を研修
研究題目「迷走神経と経絡との解剖学的相関について」

2005年 佐野動物病院にて獣医学を研修
2006年 名古屋市れもん鍼灸接骨院院長
2013年 アルゼンチン(F・バレイラ)鍼灸院院長
2016年 アルゼンチン、ドイツ、日本(名古屋市)にレモンバーム・アカデミー開設
2018年 アルゼンチンから帰国